当財団の「アド・ミュージアム東京」資料室には、さまざまな企業PR誌が所蔵されています。 その中から優れたものを取り上げ、それがどのような企業個性を表し、時代を捉えているかを探ります。

三井呉服店『花ごろも』1899年

消費と文化をリードした呉服店

19世紀が20世紀に変わった明治30 ~40年代に大手の呉服店が欧米式の 百貨店スタイルへの転換を図り始めまし た。大都市の発展、消費者の生活様 式の変化に対応し、呉服店は新しい時 代の文化を発信する最も先端的な場所 になっていきます。

広告・PRにおいてもマス・メディア を使用した広告とともに楽隊広告、タイ アップ広告をはじめさまざまな新しい手 法を導入し、時代をリードしました。

PR誌の発行は、その重要な手法の 一つとして登場しました。

『花ごろも』は、明治32(1899)年1月1 日に発行されました。編集兼発行者は 合名会社三井呉服店支配人、日比翁 助です。日比は明治38(1905)年1月の 全国主要新聞に「デパートメントストア 宣言 | (当時は三越呉服店)を掲げ、日 本の百貨店の歴史をスタートさせた人 で、先進的な思考が『花ごろも』に表れ ています。

「発刊の辞」には、まさに今日行われて いる "通信販売" のシステムが告知され ており、このPR誌はダイレクトな販売の メディアでもあったことがわかります。し かも呉服店としての衣服に関する啓蒙 的・教育的な記事が300ページを超 す分厚い冊子の大半を占め、読み捨て にできぬ充実した内容です。

"流行に先立って流行を作り、その品 物を売る「商売の広告集」ばかりとなっ ては見苦しいので、世の大家先生にお 願いして呉服に関する論説考証や小 説を集めた"と発刊の次第を述べ、今の 流行の有り様と三井呉服店の商品と読 み物で楽しくひと時を過ごしてほしいと、



1899 (明治32)年に発行された『花ごろも』表紙

編者は記しています。

鮮やかな挿画と深い教養で 語られる呉服の魅力

ページを繰って、まず目を奪われる のは、鮮やかな色彩の挿画の数々で、 最初に登場するのは洗練された一枚で す。「縮緬、梅鼠、地落し染め、振袖八 掛附、三枚重」(島原模様上着の上前 に、遠慮なく奴凧の彩色、下前は糸巻、 肩に鳶凧、糸もそのまま風のまにまに、 振袖は、光琳風の卓蕨、裾と同じく疋田 入の青紅色々の散り梅、八掛は袖と同 じ、繍入、紋は五つ、梅、椿、水仙など の加賀紋、繍入、下着二枚は、紅地縮 緬、模様は振袖の模様と同じ)は、石版 の美しい絵が晴れ着の艶やかさを見事 に紹介します。30ページにわたる呉服 の紹介はさぞ女性たちの購買意欲をそ そったに違いありません。

その次のページから「花衣 一名三 井呉服店案内」というクレジットのもと、 本文が始まります。「模様の説 高橋義

雄 は、人間社会の実用と装飾という視 点から筆を起こし、格調の高い考察を 展開します。そして日本の装飾模様の 歴史的変遷をたどりつつ今後への提言 を述べています。

「本邦女子服装沿革概略 附吉凶事 礼服 華族女学校学監 下田歌子述」 は、日本の女性の服装について太古の 昔から今日までの沿革を簡潔に整理し ています。さらに上流婦人とともに下流 女子の衣服についても触れ、明治17 (1884) 年11月の御布達で定められた 朝廷女服の大礼服、通常礼服につい て具体的に記します。そして今行われ ている吉凶事礼服に関し、婚姻の服 (冬服の部、夏服の部)を3つの等級に 分け詳述しています。冠婚葬祭の衣装 についての役に立つ案内です。

「江戸の風俗衣服のうつりかはり 大槻 如電 | は、270年間の江戸時代に徳川 幕府が出した6度の「節倹の令」の時 期に風俗の異変があることからその子 細を、衣服を中心にくだけたおしゃべり で聞かせます。

「織物の事」は、日本の織物の沿革を 記し、最近の各府県の産額と主な産地 である西陣、上州、桐生、足利、八王子 の織物について詳述しています。

「染物の事」は、京都の染物を中心に 記述され、東京その他の染物、黒染の 事、模様染の事 (友禅染)、古代の染 物の事、が説明されています。

「呉服物の事」は、呉服物はその区域 が極めて広いので便宜のため仮に、染 地類、帯地類 (胴裏類共)、袴地類、着 尺類、雑類の5つに分け、その主要なも のだけを摘記しています。染地類は縮 緬、羽二重、斜子、綸子、紹、糸好およ おかだ よしろう●1934年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年電通入社。コーポレートアイデンティティ室長を経て電通総研常任監査役。98年退職。70年の大阪万博では、「笑いのパビリオン」を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。著書に『社会と語る企業』(電通)、『観劇のバイブル』(太陽企画出版)、詩集『散歩』(思潮社)、『世界一の映画館と日本一のフランス料理店を山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか』(講談社)など。

の類も同様に幾つかの項目で概略を示 します。

「衣服裁方積方の事」は、婦人羽織、四ッ身女子羽織、参ッ身被服、四ッ身被服、四ッ身被服、婦人被服、壱ッ身男子小袖、壱ッ身女子小袖、四ッ身男子小袖、四ッ身女子小袖、本裁婦人小袖、本裁婦人長襦袢などの裁ち方が図示され、それぞれ代金が記されています。

以上が、呉服に関する記事であり、 啓蒙的・教育的であると同時に販売に 結びつくインフォメーションです。

呉服店から百貨店へ、 三井呉服店の先進的志向

その後のページはがらりと変わって、「三井呉服店本支店事業の説明」です。 「商売の多少を問はざる事」「現金正札附の事」を掲げ、一銭二銭の買い物も歓迎し、正札付きなので買うのに便利なことを述べています。

「品物を持ち出して売る事」「地方の注文に応ずる事」とし、東京市内のどこでも品物を持参して販売することや、郵便での注文には丁寧な積書(見積書)を作って回答し異存がなければ品物を回送する旨記しています。

また「宝永四年以降天保十四年に 至る三井呉服店東京本店売揚げ高一 覧」を掲出し、三井呉服店の長い歴史 と信用を示す記録を伝えています。

「流行欄」は、「御婚儀吉事用ならびに流行の男女御衣装は左の如し」と記し、「襠」「間着」「長襦袢」「小袖」「羽織」「帯」「夜具蒲団頭巾」「男物」などの見積もりを一覧表にしています。

そして「小説」は、当代人気作家の 中山白峰、尾崎紅葉作「むさう裏」です。 「今や横濱行の列車は発せんとすなり、



石版印刷による、晴れ着の紹介

梅日和の空麗かに人出頃なる午前なればや」と始まる現代風俗小説です。作中美しい着物の精密な描写が随所に現れ、いかにも『花ごろも』にふさわしい華麗な内容となっています。

「襤褸集」は、衣装をネタにした断片的なお話をつづったもので薀蓄に富んでいます。

「呉服談」は、三井呉服店理事の談話で、日本衣服の特色、日本の呉服屋営業の困難、今日の流行、日本の社交機関、日本服の将来などを論じます。

「日本の呉服屋と西洋の呉服屋」は、 日本と西洋の呉服屋の商売の仕方を細かく分析し、日本の呉服店は複雑だが 西洋の呉服店は単純であり、そのため 他の雑貨と合わせて売りさばくことがで きると記します。「外国販売店の構造と 執務の方法とを参照し、その利害得失 を研究すれば発明するところあるべし」 と結語します。すでに三井呉服店が総 合的な百貨店を志向してゆく考察がこ



こにもあるようです。

「雑誌の批評」は、『風俗画報』『太陽』などの雑誌による、三井呉服店の催しや意匠係に関する批評を載せています。これはパブリシティを再掲載し、拡散する効果を意図しているのでしょう。

最後に「合名会社 三井銀行案内」と して、三井銀行の起源、組織、役員、本 支店、営業種目を記しています。

320ページほどにもなる『花ごろも』は、顧客サービスのためだけでなく、社員、業界の意識を高めるための冊子であるようです。衣服に関する詳細な記述を中心に、知識を深め、販売に結びつけるとともに、共に成長してゆく研究誌の役割も果たしています。さらに呉服店の経営のあり方も論じられ、それを読者と共有してゆくオープンな考え方は先進的です。

『花ごろも』には、三井呉服店の企業 文化がよく表れています。